

弘前全国大会フォーラム「民芸運動をどう進めるか」 のためのアンケート集計結果

回収数35枚（全て民藝協会会員／事前回収12枚 当日回答24枚）

1、所属民藝協会と在籍年数

・所属民藝協会

宮城県（5名）

上田、兵庫県、鳥取、岡山県（各3名）

東京、京都、島根（各2名）

青森県、山梨、新潟、越前、飛騨、京都、大阪、出雲、広島県、愛媛、長崎、熊本県（各1名）

・民藝協会在籍年数

5年未満（5名）

5年以上10年未満（8名）

10年以上20年未満（4名）

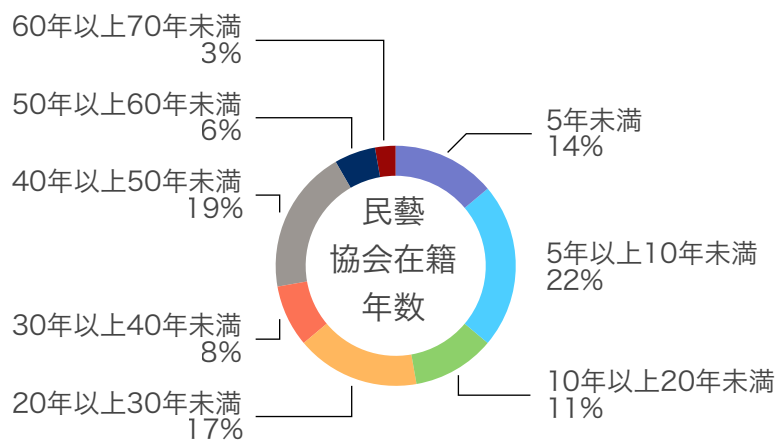
20年以上30年未満（6名）

30年以上40年未満（3名）

40年以上50年未満（7名）

50年以上60年未満（2名）

60年以上70年未満（1名）

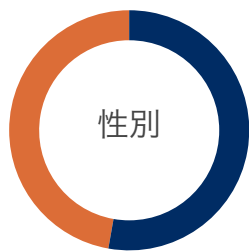


2、性別

男（19名）

女（17名）

女
47%



男
53%

3、年代

20代（1名）

30代（0名）

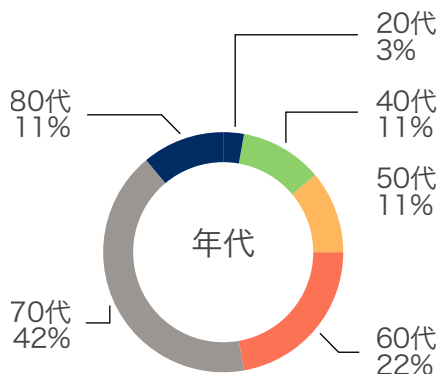
40代（4名）

50代（4名）

60代（8名）

70代（15名）

80代（4名）



4、あなたにとっての民芸とは何ですか？（自由記述）

（心の潤いや生活の拠り所、生き方の指針／30票）

- ・風土に根ざしたもの、平和、生き方の指針、生活の拠り所（19票）
- ・心の潤い、人生を豊かに（9票）
- ・特に意識せず存在している、自在（2票）

（柳美論、芸術活動の一分野といった美的価値あるもの／6票）

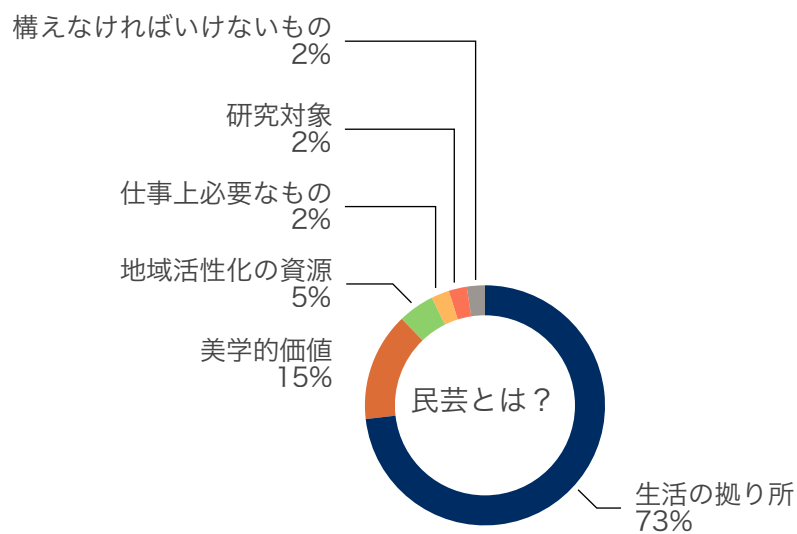
- ・柳美論（3票）
- ・芸術活動の中の一つ（2票）
- ・雑器、雑貨、雑草、など雑の美学から生まれるもの（1票）

（地域活性化の資源／2票）

（工作上必要なもの／1票）

（研究の対象／1票）

（構えなければ使えないもの／1票）



〔総評〕

程度の差はあるが、概ね民藝を生活する上で大切（必要不可欠）なものと認識している回答が多かった。

5、生活のどのような場面で民芸を感じますか？（自由記述）

（生活や仕事の場の中で意識している／41票）

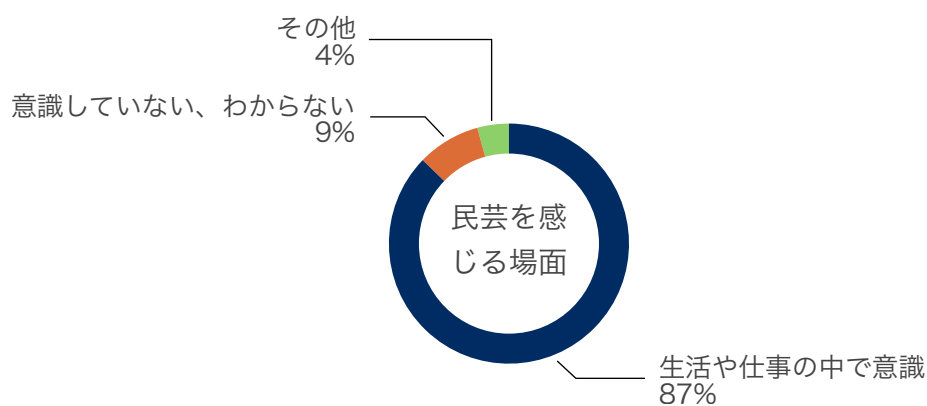
- ・日々の生活の中で。常に意識下にあるもの。毎日囲まれて生活している（15票）
- ・食事やお茶の時（7票）
- ・良いものを見たり、使っている時（産地を訪問した時のことを思い出す）（6票）
- ・ものを作る時（4票）
- ・仕事をしている時（3票）
- ・民藝館で過ごす時（2票）
- ・書齋にいる時（1票）
- ・使う時にないとあたふたと慌てて探してしまう（1票）
- ・日々の生活の中で違和感を感じた時（1票）

（意識していない、わからない／4票）

- ・特に意識することはない（2票）
- ・民藝やその理念の現代化の中にいるため、民藝とあまり感じない（1票）
- ・わからない（1票）

（その他／2票）

- ・民藝品と称するものに接した時に、現代生活に適さない民藝を感じる（1票）
- ・ものではなく、民藝運動に関わった人（柳や浅川兄弟ら）の生き方を学んでいこうと思う（1票）



〔総評〕

ものを使ったり、作ったり、食事をしている時など、生活や暮らしの中で意識している意見が多数であった。あまりに身近で意識していないと意見もあった。意識しない、わからないが肯定的な意見か否定的な意見かここで推測することは難しいが、各人のアンケートの総体から判断すると双方あるように思われる。民藝の現代化に対する疑問や、民藝運動に関わった人物を重視しているという意見もあった。

6、民芸協会へ入会したきっかけ（自由記述）

（民芸同人や先輩、友人からの誘い／11票）

- ・外村吉之介との出会い（3票）
- ・先輩の誘い（3票）
- ・友人の誘い（1票）
- ・会員からの勧誘（1票）
- ・民芸協会会員のある漆芸家との出会い（1票）
- ・浦辺鎮太郎との出会い（1票）
- ・河井寛次郎、濱田庄司、芹沢銈介を近くで見ていた（1票）

（仕事や家族とのつながり等／11票）

- ・家族（祖父や父、母など）から受け継ぐ（6票）
- ・仕事上のつながり（3票）
- ・仕事を継いだ時（1票）
- ・成り行き（1票）

（地域民芸館、関連展覧会、民藝店との出会い／5票）

- ・日本民藝館との出会い（2票）
- ・各地民芸館との出会い（2票）
- ・松本民芸館との出会い（1票）
- ・仙台市での「柳宗悦と東北の民藝」展に吸い寄せられた（1票）
- ・民藝店（仙台北原社）に出入りして（1票）

（夏期学校、全国大会、協会関連催事への参加／5票）

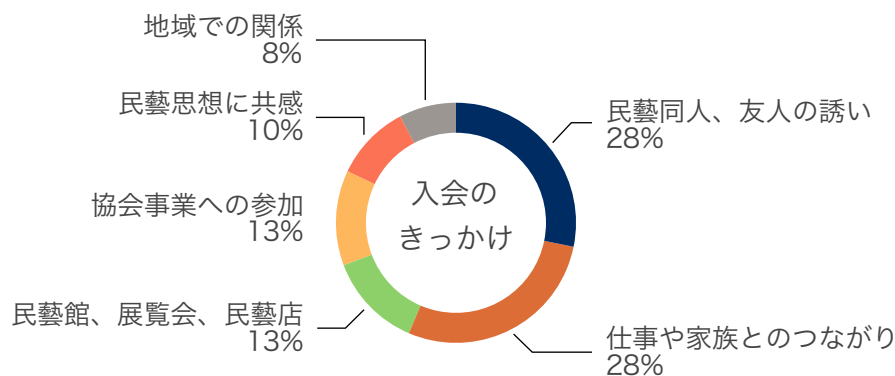
- ・夏期学校が勉強になるため（1票）
- ・京都全国大会の公開講座に参加したこと（1票）
- ・沖縄大会の活動部隊として参加した（1票）
- ・弘前大会に参加したかった（1票）
- ・協会員限定の販売会に参加したかったため（1票）

（民藝の宗教性や考え方に対する共感／4票）

- ・民藝思想に自分の宗教観との一致を見た（1票）
- ・真善美に眼を開かせてもらった（1票）
- ・学生時代に良いものは何かを追い求め、民藝の世界へ（1票）
- ・大学で工芸について学んだため（1票）
- ・3.11を経験し、もののありようを捉え直そうとしたら、民藝と出会った（1票）

（地域での関係性／3票）

- ・地域に民藝に対する高揚感があった（1票）
- ・青森をよりよく知るため、青森の人と出会いたかった（1票）
- ・使い手と産地をつなぐため（1票）



〔総評〕

民芸同人を含めた会員からの勧誘や、家族・仕事の関係で受け継いだ方が多数で同数だった。また民藝館や関連展覧会、民藝店、協会の関連事業を通しての入会も多く見られる。民藝に対する宗教性や考え方への共感も入会理由に挙げられている。地域活動の核となるものとして入会したという意見もあった。

7、現在の所属民芸協会の活動に満足されていますか？

①満足（9票）

- ・企画が多く、会員の方々も積極的に参加されている。新年会、研修、旅行などイベントが充実している。
- ・月ごとに例会を設けてもらい「民藝」の奥深さを知る機会を与えてくれる。
- ・少人数でも、毎月の例会、何かしら話が出て、そして色々話し合う。何かしら得るものがある。
- ・毎年の小さな行事を和気藹々と過ごし、切磋琢磨の学習会を楽しんでいる。
- ・若い世代の人々がわだかまりなく融合し、活動しているように思う。

②やや満足（16票）

- ・民藝運動を進める立場にしているのでできることはしているつもりですが、一般会員としては不満足。
- ・様々な内容の活動があつて満足感がある。全行事に参加できないことが「やや満足」になっている。
- ・毎月の例会や研修の小旅行など内容はしっかりしているが、仕事で自分は参加できないのが残念。
- ・今のところ何も活動に参加していない幽霊会員のようなもので、協会に対しての意識が希薄。
- ・見学会、新年会など限られた条件の中でよく頑張つて活動されている。
- ・実行できる企画を忠実にこなしている。民藝とは何か、これを考える活動が不足している。
- ・年間スケジュールをこなしている点、ややの部分はもっと若い方が増えてほしい。
- ・美しいものを見て感動を共有する機会があるため。 ・マイペースで参加できること。
- ・活動はしていないが、存在することに意味があると思う。
- ・器物の見学会にとどまらず、宗悦の哲学講話会などあれば参加した。
- ・本部の閉塞感が少しずつ解き放たれようとしている。
- ・各例会の参加者が固定化して少ないことは残念。若い会員が増えることを願う。地道に継続することが大切。
- ・展覧会（会員先達、古民藝について）、講演会、読書会、旅行（民藝館、美術館、神社・寺など）があるから。

③やや不満（9票）

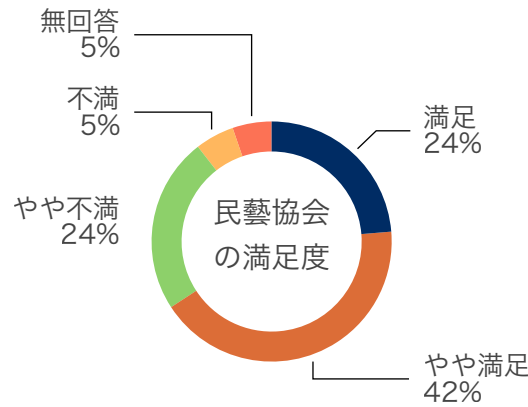
- ・もっと世間に対して民芸の考え方を啓蒙してほしい。柳先生が提唱された民芸思想を根本の思想を守りながら今の時代にあつたかたちで提案してほしい。
- ・次世代の会員が育たない（入会しない）。
- ・それぞれの地域の気候風土にあつた使い勝手の良いものを追い求めての民藝と思うのだが、手作りということで高価すぎる面がある。御社が吹聴しているようにも見える。
- ・常に会議のもと討論を重ねるが、机上論では目に見えていかない。目的、理想に一步一步、、、と歩んでいるように見えるが、月日に流されていく。
- ・自分がまだ民藝を理解していないもどかしさ。
- ・協会の具体的な活動（企画など）、運営が難しい。活動のマンネリ化。
- ・試みの企画を少し始め出したので。地区に民藝館があることの「幸い」を生かせていないと感じる。協会員同士の交流の機会が少ない。館での年中行事はほぼ恒例化しているものが多く、新しい魅力あるものが少ない。協会員高齢化の対策に歩みだせていない様子。

④不満（2票）

- ・趣味的、仲良しグループ。
- ・活動できていない。協団と分裂以来、民藝品の使い手としての主婦中心に方針を変えたが、使い手のための民藝店がなくなり、ものも現代生活から遠のき、趣味が安直化、接待付お世話したくない、参加はしたい人たちで老化衰退。

無回答（2票）

- ・入会はしているが、地区の活動には参加していない。個人的に作家の個展などを拝見しています。



〔総評〕

活動が活発な協会に所属している会員ほど満足度が高いことがわかる。会員のうち、一般会員の満足度が高い反面、役職についている人ほど協会に不満を持っている方が多い。また、本部に対しての不満も多い。活動の方針等を地域協会に助言できるような組織体制が望まれていることと思われる。

8、民芸協会に何を期待しますか？（自由記述）

〔日本民藝協会に対して（全体）〕

- ・田舎に住んでいる者にもわかるように、民芸の愛好者をどんどん増やしていく取り組みをしてほしい。
- ・現代生活には用（機能、素材）も適応せず、骨董的値段、完全に対応の遅れた民藝運動。民藝館はその歴史を含めた博物館。民藝協会は一度解散し（水尾先生の時代にその話があった）、新たに作り手の集団として再出発。民藝の現代における位置、現代への改革は今の民藝協会では無理。充電期間を作るか。
- ・「時代の寵児」のごとく、民芸＝民藝を誇張するメディアや業界との差別化。
- ・民藝のルーツから学ぶことと、現代（現実）の生活に段差が少なくなる（活かせる）といいと思います。
- ・維持するための求心力！ 若い方が入りたいと思える魅力（経済的に難しい方が多い）
- ・寄付に頼らず、しっかりした収入を作る必要がある。例えば会員の会費は本部に全部入れるようにしては？
- ・民藝の原点、改めて考えていく。
- ・生活改善運動、生き方の指針、人間として根本的に役立つ考え方といった民藝精神を伝えられたらと思います。
- ・柳先生がテーマとし、探求された道をわかりやすく伝えること、今の運動は民藝「品」の生産拡大に関心が偏っているよう見受けられます。柳思想を受け継ぐオピニオンリーダーの発掘が求められます。このまま工芸の一運動で終わってしまうのは惜しい。精神運動の拠点として、再び立ち上がることを期待してやみません。
- ・今後とも、美しく生きる活動の輪を広げていけることを切に願っています。
- ・日本における古い歴史ある工芸運動体でありながら、民藝運動と言いながら、具体的な運動目標が見えてこない。そして、目指す世界がなんなのかはっきりと言葉で示されていない。
- ・社会の方向性を修正できるような動きを期待します。
- ・軽さばかりが目立たない民藝の継承。
- ・協会には、作者、消費者、販売など立場の違う人々がいるので、利害関係の生じることは避ける。
- ・民藝以外の古い良いものも学ぶべき。
- ・平和について何かできないか。

〔地域民藝協会に対して〕

- ・協会員の交流。 ・協力して地域の活性化を図る。
- ・引き続き学びの場を提供してもらうこと。民藝の魅力を発信すること（共感者を会員として吸収）。
- ・継続した活発で意義のある活動。会員が集まる機会をなるべく多く作っていただければ有難いです。
- ・「協会」というものの設立目的はそれを維持することに、と今更ながらその厳しさを再認識していますが、あまり重くなりすぎないように受け止めていたいと思います。新しい会員を募るにも、その人に対してきっかけづくりが大

切。私の場合は良き先輩との出会い、学びの機会を与えてくださった「夏の学校」そこで出会った先生方や友人等々。協会の企画によるところです。今後も期待しています。私が夏の学校で受けた「目からウロコ、共感を呼ぶ、覚える等」そんな機会を全国的に、今より協力できればと思う。蒐集品の交流、協会員の交流など（協会の成り立ちの違いがネックになるかもしれませんが）日本の手仕事を存続させるために今できること。永遠のテーマであるが、未来が大切なことはもちろん、歴史を踏まえた上での変革を望みます。協会員同士の認識。繰り返し必要かも。

- ・美しいものへの感動を共有できる場であること。

〔『民藝』に対して〕

- ・当民芸協会の会員も高齢化してきているので、若い世代を入会させ活動に参加させている他の協会の活動など「民藝」等で積極的に紹介してほしい。

〔夏期学校に対して〕

- ・最近、夏期学校に参加することで、新しい世界を知り、講師の先生方の話を聞いたり、参加された方々と交流することで楽しんでいます。
- ・民藝運動は学習、普及中心に夏期学校など。

〔作り手に対して〕

- ・私自身が作り手なので、やはり自作の製品の販売等で力になってほしい。
- ・現在も続けられている日本の「ものづくり」への提言・アドバイスのなもの。
- ・私自身は生涯（50年間）個人名を出さないで何万点の染織品の仕事をしてきた者です（ほとんど普段着です）。これからは民藝と言えども作品に個人名を記して責任を持って各自の特徴を生かすべき時に来ていると確信します。河井、濱田、芹沢師生存時は、実力、人気ともオーラあり、核にもなり、協会にも勢いがありました（はっきりした目標あり）。これから30から50年間に一人は巨匠が生まれる環境を整えるべきである。他の官展、伝統工芸展などの優作品もカラーで民藝誌に掲載すべきである（民藝という殻に閉じこもらないためにも→良いものは良い!!）。
- ・秋の館展で「民藝館賞、奨励賞」を受賞しても世間的には「日本工芸会会員工芸展入賞」に比してはるかに弱いのが現状であります。具体的には、館展の際「審査員の作品」を必ず手本となるべく、カラーで民藝誌に掲載すべきである。編組品、アケビ、サワクルミを材料とした作品など、各民芸店、組合の協力出品などという曖昧な形にしないで、必ず作者名を明記すべきであります。各民芸店では「これは誰々の最後の作品（大皿など）だから貴重です」などといって売却しているのをよく目にするのである。私自身の染織品「織人の名前」のみ各自の筆跡で添布していますが、良い仕事をしている織人には「次回もこの人に織ってもらいたい」と消費者から注文が数多くあります。

〔使い手に対して〕

- ・日常生活の上で、少しでも気持ちの休まる生活用具を使い、将来にわたって精神的に豊かな生活をすることを学ぶ。
- ・作家さん達が安心して生活できるようにバックアップしてほしい。

〔若い世代を増やすことに対して〕

- ・協会に入会しない、若い民藝愛好者が増えている。民芸に入りたがらない。亡き久野恵一氏の民藝協会に対する心情が私には理解できる。

- ・若い来館者（熊本国際民藝館）はほぼSNSでの情報による。30年程前には考えられないこと。この状況の取り込みをしっかりと活用していかななくてはならない。楽しく活用のある協会であれば、人は離れていく。

- ・若い人々の意見、新しい考え方に耳を傾け、できるだけ活動に生かしていくこと。全国の手仕事の現状を紹介する活動を各協会全員への発信をするなど、積極的に行って欲しい（見学会やワークショップなど）。

〔総評〕

様々な提言が寄せられているが、若い会員へのアプローチ、作り手へのアプローチ、会員を増やすためのアプローチ等が多く要望されていることが見受けられる。運動体としての民藝協会の活動がより期待され、民藝の考え方がわかりやすく広まっていくことが望まれていることもわかる。